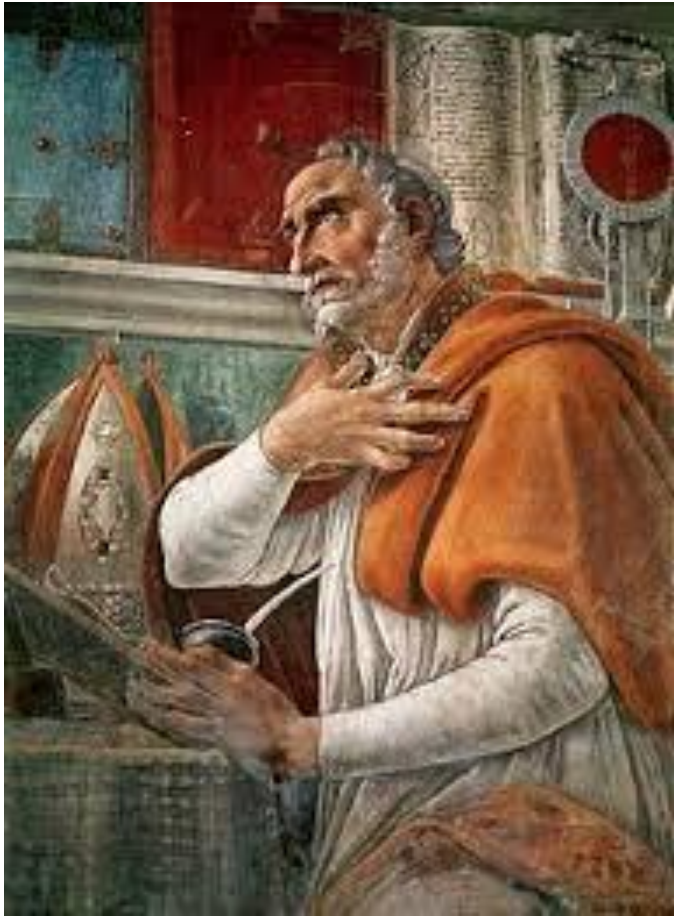


第1回 アウグステイヌス

—愛したいけれど愛せない問題について—

アウレリウス・アウグスティヌス



(AD354-430)古代末期に生き西洋思想の豊かな源泉となったひと

【略歴】

- 354年: 北アフリカのタガステ（現アルジェリア）に生まれる。母はキリスト教徒、父は異教徒。
- 青年期: 出世のために修辞学を学び、一時マニ教に傾倒。カルタゴで放蕩生活を送りながらも、ギリシャ哲学の探求に励む。
- 384年: ミラノで修辞学教師となり、アンブロシウスの説教に感銘を受ける。
- 387年: キリスト教へ回心、洗礼を受ける。
- 395年: ヒッポの司教に就任。異端（マニ教、ドナトゥス派など）と論争し、カトリック教義を確立。
- 430年: ゲルマン人（ヴァンダル族）の包囲下にあるヒッポで死去。



【主な著作】

『告白』：全13巻のうち、1~10巻は自伝、残り3巻は聖書について。神に向けた自分語りでありながら、その語り自体が、神の愛の中で生きるとはどういうことかを読み手に明らかにするような構造になっている。

『神の国』 『三位一体論』 『洗礼論』 など：
キリスト教の教義におけるさまざまな問題を論理的に解決することで、異端に反論し正当な教義を守ために書かれた。神学書であると同時に、記憶や愛、共同体といった哲学的なテーマについてアウグスティヌスの見解が詳しく語られる。

悪の問題

- ・ マニ教の概要

- ①善である光（神）に悪である闇が挑んだ結果、人間や動植物が生じた。
- ②したがって、人間そのものが善悪の闘争の場であり、魂は常に肉に圧迫されて苦しんでいる。
- ③圧迫が弱くなることが魂が善の状態にあるということである。

→肉体を敵視して禁欲的な生活を説く、最新科学としての神話的な宇宙生成論や信者同士の親密な共同体

続・悪の問題

新プラトン主義などギリシャ哲学の探求によって、善悪や心身を対立させるマニ教の論理的矛盾を知る



キリスト教がギリシャ哲学の完成なのではと考え始める



知的な確信はあっても実際に「キリスト教徒」として生きることの困難に葛藤する

【自身の罪の問題】

なぜ精神が命じても意志は動かないのか？

なぜ新たに意志しても決断に至らないのか？

なぜ善を意志しているのに実際は悪を行ってしまうのか？

話し合ってみよう

- 1、 「愛したい」「ゆるしたい」と思うのにできない時はありましたか？
それはどんなときでしたか？
- 2、 その時どんな気持ちでしたか？また、その時どんなふうにその問題を
解決しようと思いましたか？

回心の瞬間

己の弱さ、醜さを痛感し、自分を責めながら涙を流していた時
隣の家から「取れ、読め。取れ、読め。」という子供達の遊び声
が聴こえ、そばに置いてあった聖書を開く

'日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒
宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリ
ストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を
用いてはなりません。'

ローマの信徒への手紙 13:13-14

私はそれ以上読もうとは思わず、その必要もありませんでした。
というのは、この節を読み終わった瞬間、いわば安心の光とでもいっ
たようなものが、心のなかに注ぎ込まれてきて、
すべての疑いの闇は消え失せてしまったからです。（『告白』）

意志は自分の力では実現できない

→神の恵みによって神の愛を知るようになり、神を愛するようになる
ことで初めて心から善を願い行うことができるようになる

「悪」それ自体が存在するのではない、ただ「善の欠如」があるのみ

『告白』における人間理解

「偉大なるかな、主よ。まことにほむべきかな。汝の力は大きく、その知恵ははかりしれない。しかも人間は、小さいながらもあなたの被造物の一つの分として、あなたを讃えようとうします。それが、己が死の性を身に負い、己が罪のしるしと、あなたが「高ぶる者を退けたもう」ことのしるしを、身に負うて彷徨う人間です。それにも関わらず人間は、小さいながらも被造物の一つの分として、あなたを讃えようとするのです。喜んで讃えずにはいられない気持ちにかき立てる者、それはあなたです。

あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。」

創られた存在としての人間

「無からの創造 creatio ex nihilo」

- ：創造主である全知全能の神が、完全に自由に全てを創造した
- あらゆる必然的な因果からの解放
- =神の意思によって創造された
- =全ての被造物は神の選び（愛）の結果

神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。

神はこれを見て、良しとされた。

創世記1:21

なぜ悪が存在するのか？

神は最善なので神が造ったものは全て善である



「悪」それ自体は存在しない



悪は「善の欠如 privation boni」

不完全さ、弱さ、有限性が存在するのであってそれらは厳密には「悪」それ自体ではない

人間の限界

神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。
創世記1:27

「神の似姿 imago Dei」としての人間
→精神(霊性・知性・理性などの認識能力)、意志、感情をもつ

抽象的な対象を認識する能力、非物体的・永遠的なものの認識
自分の考えに従って意志し、何かを作り何かを行う
→自由意志

人間の限界②

原罪の存在

→エデンの園におけるアダムとイヴ

→「善悪の木の実」を食べる = 神になろうとする

「高ぶり superbia」によって神（真理）を把握できない

↓

真理を把握したとしても実行できない

= 自由意志はあるが欲望を完全にコントロールすることはできない

『告白』における善の可能性

「神の転倒的な模倣」

= 他人よりもより多く認められることを欲する

= 優越感と不安という矛盾

→ アウグスティヌスは、「神の転倒的な模倣」という人間の罪性自体が、神と人間の本当の関係性（愛）の成立可能性を示していると考えた

→ 「悪」すなわち「善の欠如」はかえって善の存在を証明しているという逆説

アウグスティヌスは、人間の罪深さに絶望しない
罪のあるところに、いつも回心の恵みが存在するから

律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が
増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。

ローマ信徒への手紙5:20

→彼に起こったことは彼の親友アリピウスにも起こった。
神は愛そのものなので、神と人との関係は、人と人の関係を通して共鳴する

神は愛です。

1ヨハネの手紙4:9

『告白』における自己理解

「私はそれまで抑えていた涙をはなち、溢れたいだけ溢れるにまかせ、涙を以て心の床としました。そして心は涙のうちに安らぎを得ましたが、それは私の悲嘆を傲慢な仕方と解釈しようとする人間の耳ではなく、あなたの耳がそこにあって嘆きを聴いてくださったからです。」

モノローグ（独白）ではなくストーリー（物語）としての告白
→常に「あなた（愛する方）」との関係における自分の記憶を「あなた」に対して語る

『告白』における自己理解②

「私 ego」 = 「心 animus」

= 「記憶」 記憶とは常に何か誰かについての記憶

→ 「私」を語ることは私に示された神の恵みを語ること

→ 自分の不完全さに向き合い、完全な方について知ることで、自分を常に神の恵みにおいて知る

神を知ること = 自分を知ること = 他者を知ること

→ 赦しの可能性

読者は「知る」姿勢においてのみ『告白』を理解できる

神を知るには

「御身から乞い求めなければならない。御身において尋ねなければならない。御身のもとで戸を叩かななければならない。そのようにして、ただそのようにしてはじめて、求める者は与えられ、尋ねる者は見出され、叩く戸は開かれるであろう。」

→愛の実践の記録であり知的探求の結果でもある『告白』

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、
わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。

ここに愛があります。

愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、
わたしたちも互いに愛し合うべきです。

いまだかつて神を見た者はいません。

わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、
神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

1ヨハネの手紙4:10-12